

中島敦「斗南先生」論

— 東洋精神の博物館的標本 —

孫 樹 林

「斗南先生」は、「昭和七年の頃、別に創作のつもりではなく、一つの私記として書かれたもの」^(注1)であり、昭和17年7月15日、第一創作集『光と風と夢』を筑摩書房より刊行した際に、少し手を加えて収録したものである。すなわち、この私小説風の「斗南先生」は執筆して10年の歳月を経て世に出たものであり、また、中島敦文学の実質的な出発を示す作品として位置づけられている。昭和17年といえば、中島敦は作家としてすでに世評を得た時期であり、彼自身も作家として立とうとした時期でもあった。この時期において、高校時代から大学時代までの諸習作の中、「斗南先生」のみを選出し収録したことから、作者が如何にこの作品を愛着しているかは伺えるであろう。

中島敦の文学には、意識的にも無意識的にも中国思想・漢文化を思考の基底、或いはその思考軸に据え、一筋に自己を追求し、内なるものの探索を行う傾向が見られる。この中島敦文学に一貫する、二つの要素——中国思想への思いと自己探索——は、「斗南先生」においてはじめてその姿を世に見せたところがある。儒学の家に育ち中国思想の影響を強く受けている中島敦が、10年の歳月を経ても依然として「斗南先生」に執着しているのは、おそらく作者はこの作を創作の起点以上の、自分の内なるものとして原初の且つ重要な情報をその中に内蔵させているからであろう。

「斗南先生」は「中島文学の解纜ともいべき」^(注2)重要な作品として、一部の研究者に注目されているが、中島敦の他の作に比べれば、その構成や文学性などに円熟性が欠けていると思われるのであろうか、その世評は今ひとつで、論考も少ない。先行研究では、中島の「旧家」の「血の弱さ」と「己」という存在を形造っている「血——遺伝」^(注3)に対する凝視とする「家学」重視の論、「自我の観察は、彼の最も初期の作『斗南先生』において早くも一種の方法的完成にまで達している」^(注4)とする「自我の観察」論、そして「純一なる魂の所有者として存在している」「原型の発見」^(注5)とされる「原型の発見」論などが、代表的なものと思われる。しかし、「自我の観察」論は無論、「家学」重視の論もまた現象提起に留まり、例えばその「遺伝子」の究明は行わない。「原型の発見」論ですら、三造をはじめとする中島敦作品群に出てくる人物たちに共通な性格の「原型」を斗南に「発見」する、そういった斗南先生の精神や思想上の「原型」、すなわち中島敦の言う東洋精神の「博物館的標本」とその意味の追求はさほど行われていないのである。しかし、この「博物館的標本」としての「精神」こそ、「斗南先生」に潜んでいる伯父斗

南の魂であり、また中島敦の全作品を解明する一つのカギだと考えられる。

そこで本稿においては、こういった先行研究を踏まえつつ、「斗南先生」に内蔵している斗南の時代離れた奇矯な性格の内実、および斗南の文「近視眼的支那観」、「日本文章の墮落に候」^(注6)などを参考にすることによって、「昔風の漢学者気質と、国士気質との混淆した」斗南と中国思想との関係、また中島敦における「斗南先生」の意味などについて私見を述べたい。

—

「斗南先生」は、六つの章と「付記文」より成り、三造・「彼」＝中島敦が、伯父中島斗南の死を前にした約半年間の姿を描きつつ、自己観照もする「私記」である。これは、三つの時間から成っている。すなわち、昭和5年2月から6月までの斗南生前にかかわる第一の時間、斗南の遺稿集が出版された昭和7年の第二の時間、そしてその10年後の今現在の第三の時間である。この三つの時間は、ちょうど中島敦の高校時代、大学時代、作家として立とうとした時代と重なっている。

「斗南先生」は、斗南という「時代離れのした」変人、「東洋精神」の「博物館的標本」を描くとともに、斗南先生の傍観者として設定された三造の、伯父斗南に対する批判、同情、そして理解、最後には肯定という変っていった心境も追ったものである。

その内容を少し追うと、最初、主人公の三造は、斗南先生の変な行動、落ち着いたない性格、狂騒性を帯びた峻厳さ、および性格上の悪根性に対し批判的で、冷徹な眼を投じていた。高等学校の学生である三造には、この伯父のこういった「時代離れのした厳格さ」が、「甚だ気障な厭味なものに見えた」。三造は、「自分の魂のそこから、少しも己を欺くことなしに、それを正しいと信じてそのような言行をしている」ような伯父を嫌い、「彼と伯父との間にどうにもならない溝がある」ように思えた。「何しろ、彼と伯父との間にはちょうど半世紀の年齢の隔たりがあつた」と思う。しかし、三造がこれほど嫌っている斗南伯父であるが、親戚の多くに、三造の気質がこの伯父に似ていると言われた。年取るとこの伯父のようにならなければいいと言われていた。これは三造にとって容認できない、しかし定めのような残酷な嘲笑である。感情的に、どうしても受け入れられぬこの問題を抱え、三造は身近にいる伯父の行動と性格をいちいち検討し、自分が伯父と判然と異質な存在であろうと努力するのである。三造は、伯父の日常生活におけるその奇矯な行動の背後にある気質をいちいち点検し、「彼の意志」「彼の感情」「移り氣」という三つの方面から伯父の内部に問題を発見しようとしたのである。

この三点を要約すれば、次のような斗南像が浮上してくる。伯父は、「行動の動機は悉く感情から出發して」「没理性的」で、「執拗醜惡な面貌」を呈するが、それはまた子供のような純粋な「没利害」の美しさを示している。彼の感情も意志も「移り氣」ではある

が、その儒教倫理とその儒教道徳への服従は、「頗る強烈」であるし、時間的には甚だしく「永續的」である。彼は「自分が嘗つてその下に訓練され陶冶された規律の命ずる方向に向かつては、絶対盲目的に努力し得る」と考え、そこに彼の「意志的な努力」を示している。したがって、このような「東洋的悟性」を有する斗南は、「東洋が未だ近代の侵害を受ける以前の、或る一つのすぐれた精神の型の博物館的標本」となるのである。

「斗南」という人物の典型性、或いは悲劇性は、「恐ろしく時代離れ」のした言行にある。ここでいう「時代」とはむろん東洋文化や精神などが次第に忘れられるとともに、西洋文明や思想が漸次に時代の主調音となり、支配的な地位を得ている近代確立の時期をさすであろう。こういった時流において、時代の子であった三造にしてみれば、斗南の思考と行動は確かに様々な「嫌味」があり、「時代離れ」的なものだったのである。しかし、伯父斗南のこの「時代離れのした」言行は、ほぼ、彼の精神深部まで染みこんだ漢学教養と東洋精神、すなわちもはや古くなった思想、意識、価値観、倫理観などに由来し、あるいはそれに支配されたものでもあった。

中島家の儒学は祖父の撫山の代から始まる。撫山には10人の子供があるが、この10人の兄弟の中で、父田人をおいて、漢学者といわれる者が3人おり、長男の中島靖（綽軒）、次男の端（斗南）、三男の竦（玉振）である。村山吉廣氏『評伝・中島敦——家学からの視点——』（注7）によると、中島端は、通称端蔵、号は斗南という。別号には「忽堂」「復堂」などがある。安政6年（1859）1月生まれ、昭和5年（1930）6月13日に没している。斗南は幼くして父撫山から句読を受け、継いで亀田鶯谷の門に学んだ。明治15年、24歳の時、斗南は父撫山の宅に設けられた言揚学舎の届出人となっている。この学舎は撫山の幸魂教舎そのものであり、斗南がその教授陣の一端を担ったものである。22年、31歳のころ、斗南を中心として地域の有力者たちにより無邪志会が形成された。会の主旨は「日出処の正気を発し、君子国の美風を存養し以つて一世の弊を挽回するに在り」とされる。また、その同士と明倫館という学校を興したが、間もなくやめ、明治末年から昭和のはじめにかけて、もっぱら中国問題に関心を寄せ、よく大陸に渡り漢学者と交流していた。詩文集『斗南存稿』（昭和7年刊）の外、『支那分割の運命』（大正元年刊）、『近世外交史』（明治24年6月刊）などがある。

斗南には、遺稿『斗南存稿』（注8）が後に出版される前に、雑誌『日本及日本人』に投稿した「近視眼的支那観」と「日本文章の墮落に候」がある。この二つは、「時代離れのした」人物を理解する一助になるので、ここで概観してみることにする。これによって、「昔風の漢学者気質と、国士気質との混淆した精神」の斗南像が浮上してくるであろうと思う。

大正元年10月『日本及日本人』第592号に、斗南・中島端の文「近視眼的支那観」が載っている。この論の要旨は、混迷する国際情勢の中で、日本の朝野における中国観は、近視的であるので再検討し、修正すべき必要がある、ということである。文章は、先ず自然

の台風の怖さを述べることから始め、直ぐ筆を転じて国際情勢に迫っていく。

政治上の颶風に至りては、更に最も怖るべき者あり。(中略) (傍点原文。以下同。)
蓋ぞ前日満清政府の事を見ざる。満清政府が顛覆の勢は二三年前より始まれるにあらず。余輩も十年來屢々人に対して説きもし、筆にもしたり。されど椽下漢の苦言は、いつも堂上人の耳に入らず。我が外交当局中一人の其の兆候を看破せし者なかりき。在野の政論家亦一人の真実此に思ひ到りし者もなかりき。(中略) 満清政府の顛覆は、一霎の前駆的風雲のみ。想ふに今後の颶風は、更に大に急に、更に最も激烈なる者あらん。東亜の天地、將に一時暗黒世界を現出せんとす。而して我が官民は、性懲もなく、悠然煙を吹きて、太平樂を謳歌しつつあり。窃に怕らくは一旦変起らば、必らずや噬臍不及の悔あらん。

続いては、最近ある外交家から聞いたことでは、中国のことが判らないとのことに対し、よく「分らぬとは何事ぞ。十分研究してもとて分からぬか」と罵倒、また、「支那の事は、支那の安危にあらず、東亜全体の安危なり、また我が帝国の安危なり。」と指摘する。それから、北京の公使館の伊集院公使は、中国の政治や歴史を暗誦できても、文学宗教関係になるとどうか、青木將軍は中国語が話せても歴史文学の一端すら理解できないだろうと、更にこの二人は「閉門主義」で、多く外人の言に耳を貸さず、官場の応酬を除けば茫然東西をしらずと、中国に関する知識の乏しさなどを厳しく非難する。そして、書記官通訳の輩が上司の旨を奉迎する、新聞通信員が三流以下の人で、中国語なら一知半解、欧米人の唾余を拾うと、罵倒する。

そして、西洋人と東洋人との差異に、転じる。「大抵欧米人と東洋人と、先天的資質已に同じからず、後天的資質も亦同じからず。言語、文字、風俗、習慣、歴史、制度、道德、宗教、一として相類せる者なし。欧米人が支那の事情を研究するの難きは、猶飛鳥の眼を以て池魚の心を測るがごとし。」と指摘する。また、日本の官民がこのような欧米人の前に低頭し、拝跪して、一言を請うなどになったら、羞恥だと、主張する。しかも、「蓋欧米人の性癖、物質上の打算最も精密を極めて、糸毫をも遺さずれども、精神上体察に至りて往々粗漏を免れず。此も亦彼等が十分東洋の情偽を看破すること能はざるの一原因なり」とする。

日中外交史上における日本関係者の無神経さ（清が日本を対等的な関係において持成すのではなく、尊者が卑者を招待する「自尊自大」であること）をも批判した。後に、常識を持って中国事情を処理するのはいけないとし、欧米の対中評論を窺う当時の風習を指摘してから、「要するに一点自信の念なきに由る、亦二十年来欧米崇拜の餘毒に出づるのみ。しかも此輩の言申斐なき腑申斐なきは、此輩自身の事。独り国家民生の将来を奈何せんとする。嗚呼東亜の新興國を以て、六千方の衆を以て、竟に独りの東大陸の真相を看破する者なきか。余輩の慨して懐する所以、實に此が為めなり」とした。

以上の紹介を通して斗南の性格から、彼の哲学、価値観、倫理観、乃至理想なぞの精神

深部を覗くことができる。

ここに現前されている斗南は、奉公できる運にあらずとも、また国のために尽瘁することができずとも、彼は、なお国のために憂え、国のために建言する。また国のために憤慨し、国のために怒罵をする。言わば、斗南は徹頭徹尾国事を憂える国士なのである。彼が、考えていることは、日本のこと、中国のこと、東亜のこと、東洋人と西洋人のこと、東洋文化と西洋文化が相異なること、東洋人が如何にして西洋列強の霸権的な分割活動を制することができるかなどなどである。

「斗南先生」にもどってみよう。以上の抱負（彼の自嘲で言うなら、単に、そのロマンティズムやエグゾティシズムにそそられたためである）を実現させるためには、彼は「落ち着かない」毎日を送り、生計を凶り妻を娶る余裕すらない。中国に長期間渡ったり、また、中国の学者や要人に接したりすることによって、自分の主張をアピールするのである。「斗南先生」の冒頭部に記された、文求堂から上梓された一昨年夏死んだ伯父「斗南」の詩文集に、「清末の碩儒」の羅振玉^(注9)の序文がついている。この序文に斗南の性向が端的に描かれていることは言うまでもない。

斗南は、中国のことをいつも気にかけていたらしい。重病で、もう助かる見込みの無い際にも、その日の新聞の支那時局に関するところを三造に読ませて、じっと聞いていた。また、陸上競技で支那が依然無得点であることを彼の口から確かめると、我が意を得たというような調子で、「こういふやうな事でも、矢張支那人は徹底的に懲して置く必要がある」と呟いた。

「矢張支那人は徹底的に懲して置く必要がある」というのは、日本の「狂熱的な國士氣質」としての、彼の時代的な立場でもあり、彼の本音でもあろう。しかし、その底には、彼の悔しい気持ちも密かに宿っているのを見逃すことはできない。その一傍証として、斗南が「日本文章の墮落に候」において「現在の支那人に孟子の氣象見識の千万分の一なりとも伝はり居り候はゞ、今の見苦しさは、万万無之筈に候」と嘆くことも挙げられる。即ち、清末以来の中国外交史上に見られる「自尊自大」に対する反発を除けば、彼の中国に対する非難や批判は、同じ東洋人として、清朝の欧米列強に分割されつつある中に現れている無能力、またその腐敗した状況に対する憤りの念の表明なのである。

あわせて、重要な要素は、彼が、明治維新以降の一國士であり、西洋文明に対する最も強烈な批判者でもあることである。欧米列強を問題の外におき、東亜という地域だけ考えれば、彼はあくまでも一愛国者、「支那人は徹底的に懲して置く必要がある」と考えるのも不思議でもない。しかし、欧米列強の分割活動を前にすれば、彼の立場は中国の肩を持つことも明々白々である。そこに当時の風潮であった「大東亜共栄圏」意識が混入していることも否定できないが、この斗南は、教養、思想、感情においてもはや儒学の発生地である中国と一体化していることも事実のようである。

くわえて、斗南の東西文化観も注目すべきところがある。当時の日本の官民が「タイム

スの評論を窺ひ、耳を彼得堡のかぜに聳て、ノーヴレミヤの批評を聞かんとす」のような、中国に対する「近視眼」的になってしまったのは、「要するに一点自信の念なきに由る、亦二十年来欧米崇拜の餘毒に出づるのみ。」と結末をつけていることである。これが斗南の国士精神、若しくは国粹精神の流露であるが、その底に彼の東洋文化と西洋文明に対する独特な見識があるのである。

斗南の論理によれば、西洋人が中国のことを研究し、理解するのは、「猶飛鳥の眼を以て池魚の心を測るがごとし」である。なぜなら、「大抵欧米人と東洋人」とは、「先天的資質已に同じからず、後天的資質も亦同じからず。言語、文字、風俗、習慣、歴史、制度、道德、宗教、一として相類せる者なし」だからである。ここでは、西洋文化と東洋文化との差異を指摘していると同時に、違う文化圏の西洋人には、中国の事象を根本的には理解できないと断定する。また、日本の官民がその認識を知らずに西洋崇拜していて、「彼の前に低頭し、拝跪して、一言を請ふ、付和雷同することを羞恥と嘲笑し、批判するのである。さらに西洋文化と東洋文化とはどう相異するかということ、「蓋欧米人の性癖、物質上の打算最も精密を極めて、糸毫をも遺さざれども、精神上体察に至りて往々粗漏を免れず。此も亦彼等が十分東洋の情偽を看破すること能はざるの一原因なり」と指摘する。東洋文化の精神的な要素に対し、西洋文明は物質的なものを重視するという東西文化観、また、この両文明の現代社会における対立性、また「二十世紀の最大問題はそれ殆ど黃白人種の衝突か。」^(註10) などなどの言及は、見識のあるものであり、それはもはや社会現象論を離れ文化精神論にまで高められているのである。

二

斗南が、「昔風の漢学者氣質と、国士氣質との混淆した精神」の持ち主である証拠としては、同じ『日本及日本人』に投稿している「日本文章の墮落に候」も挙げられる。

この大正5年9月に発表された文では、当時の「文体の統一」論に対し、伝統を無視し口語体を以って大正の文体とすることを暴挙と罵る。続いて、「小生は元來儒家の不肖子にて候」、「数へ年の六歳より白文の論語素読を課せられ候。万事其調子に候ひし故、作文抔も十三四の頃より専ら漢文に力を用ゐる様に馴され来り候。其傍漢詩をも作り覚え候」、「苦心慘憺、二夜三夜も呻り続け候事も候」と回想し、現在の文章の場合に見られる、「達意の一方」的で、「一氣呵成的に文字を綴る」、「苦心も用意も、殆ど零に候」といった現象を揶揄している。

肝腎なのは、この次である。上に述べた「日本文章の墮落」を列挙したのち、「小生の平日愛読致候文章」を挙げている。国文では、「古事記」、「枕草子」、「徒然草」の三点を取り出した後、「論語」、「左氏伝」、「国語」、「孟子」、「莊子」、「韓非子」、「史記」を挙げている。そして、それぞれの文章についてその特徴を説明している。そして、「当代文豪

の作に至りては、実に文運全盛の時代とて、桃紅、李白、牡丹、芍薬、一時に開きて、妍を争ひ麗を競ふとも可申候へども、愛誦の2字を下すに至りては、少々差控へざるを得ず候」と続ける。漢文に対する愛着が紙上に溢れているのは言うまでもない。

斗南の「日本文章の墮落」は、単なる「墮落」した「日本文章」を非難するに留まっているのではない。彼は、文章の墮落を非難し、文章の大切さを説明する中に、自分の志を密かに託しているのである。「文章は経国の大業なり、不朽の事業なりと云ふも、操觚者は無冠の帝王なりと言ふも、確かに一事實に候」と、文章の重要性を、絶対的な高さに持ち上げた。「支那にても古代より立德、立功、立言、を以て三不朽の業と数へ来り候程にて、立言と言ふ事は、最も重大なる意義を有し居り候」、「国家の事業に関係あるより見れば、経国の大業とも可申。後世に伝はる点より見れば、不朽の事業とも可申」とも記す。

「立功」、「立德」、「立文」を始めて「三不朽」としたのは、「左伝」であるという^(注11)。魏晋時代になると、曹丕が、「典論」において「左伝」の「立功」、「立德」、「立文」の「三不朽」説を「経国之大業、不朽之盛事」とし、よりいっそう高い段階に昇華させた。それ以降、中国史上において、文章そのものは社会の道德と国家の興廃に関わっているものとし、また、文章を持って万物の中に高く聳え、万代にも芳名が残るものとされるようになってくるのである。したがって、中国の歴代にはどれほどの文人が、苦心惨憺して文章を作るのに一生を尽くしていたのかは数え切れない。この傾向と状況は、中国文化に、きわめて重要な一特徴を作り出した。すなわち、文章そのものは、実用性と功利性を強調されることになったのである。したがって、中国の文章の目的は、従来「述志」、「伝道」、「垂教」の枠を超えないのもそのためである。文章の実用と功利を強調することこそ儒家の道德観念を高揚することになるのである。

斗南の前記の「文章は経国の大業」、「不朽の事業」などの論は、上に述べた中国伝来の儒家思想から影響されたことは確かである。斗南自身の「立言」の目的には、文人的なロマンティシズム的な傾向もありつつも、「立功」「立德」という意識がリアルに存在しているのは否定できない。斗南はこういった思想を持ちつつ「日本文章の墮落に候」において、墮落した文体を非難し、文章のあるべき姿を示し、文章の効用を強調、その実際的な効果として日本近代化途上における文章の作用を挙げて自らの意志表明をしたのである。

しかし、斗南はそれだけに終わらず、また日本の現代の「墮落」現象への批判にもかかわっていく。むしろ、墮落現象を鞭撻することは、もはや「立言」の範囲を超え、文章の「効用」をもって「立功」「立德」を行なおうとしている斗南の、国士としての、また東洋の儒教者としての面影が鮮明に浮かんでいるのである。ここでは、儒教の唱える「三不朽」が巧みに一体化されている。

以上から判断すれば、斗南先生の精神構造は、儒教文化に育ちその教養を持ちつつ、近代化する途上に国粹精神の要素も溶け込んだ、二重性をもっていると、指摘できよう。中島敦の言葉で言うなら、「昔風の漢学者気質と、狂熱的な國士気質との混淆した精神一東

洋からも次第にその影を消して行かうとする斯ういふ型の、彼の知る限りでは其の最も純粹な最後の人達の一人なの」である。

斗南は、『孟子』の巻頭にある部分、つまり道德主義を鼓吹するために遊説する孟子が魏王との対話の場面を特別に鍾愛するらしく、そのところを「日本文章の墮落に候」に次のように引いている。

開卷第一、梁惠王が叟不遠千里而來、亦將有以利吾國乎。との間に、王何必曰利。亦有仁義而已。とあたまごなしに一喝を喫はせし処、如何にもきびきびしく候。又景春が公孫張儀豈非誠大丈夫哉。一怒而諸侯懼。安居而天下熄。と云へるを、是焉得為大丈夫乎。子未学礼乎。と一棒して、居天下之広居。立天下之正位。行天下之大道。得志与民由之。不得志独善其身。福貴不能淫。貧賤不能移。威武不能屈。此之謂大丈夫。

これを、「斗南先生」における斗南と重ねてみれば、孟子の「王何必曰利。亦有仁義而已。」や「大丈夫」にかかわる人物像、すなわち、孟子の精神と斗南の精神とが合体した、「東洋が未だ近代の侵害を受ける以前の、或る一つのすぐれた精神の型の博物館的標本」が、我々の目の前に浮き彫りにされてくるのである。

三

三造の斗南への印象は、嫌味より、親近、理解、また賛同へと、感情的な、または理性的な円を描いて変っていった。この疎遠から親近にいたるまでに、10年の歳月がかかった。発表直前に書いたらしい補充文がこの小説の末尾に付け加えられ作者当時の心境を記している。

右の一文は、昭和七年の頃、別に創作のつもりではなく、一つの私記として書かれたものである。十年経つと、併し、時勢も變り、個人も成長する。現在の三造には、伯父の遺作を圖書館に寄贈するのを躊躇する心理的理由が、最早餘りにも滑稽な羞恥としか映らない。十年前の彼は、自分が伯父を少しも愛してゐないと、本気で、さう考へてゐた。人間は何と己れの心の在り處を自ら知らぬものかと、今にして驚くの外はない。

伯父の死後七年にして、支那事變が起こつた時、三造ははじめて伯父の著書「支那分割の運命」を繙いて見た。(中略)其の論旨の概ね正鵠を得てゐることに三造は驚いた。もう少し早く讀めば良かったと思つた。

小説を書いたのは昭和8年であるが、その内容は高校時代のことである。この小説を世に送った時になると、三造＝中島敦はもはや伯父嫌悪から離別し、その代りに伯父に対する愛情が紙上に溢れてくるようになる。つまり、10年の歳月が経つた今になると、昔の斗南印象と180度變り、新しい斗南像が誕生したのである。

中島敦自身は「時勢も變り」、「個人も成長する」ことをこの變化を促した原因とした。

「時勢」とは、無論外在状況その全般、「個人も成長する」とは、中島敦の内なる変化なのである。

中島敦年譜を見ても判るように、この小説を書いた時はちょうど中島敦が作家としての萌芽期にあり、この小説を世に送った時はちょうどその成熟期にあったのである。中島敦は昭和10年（27歳）まで関心を寄せていたのは耽美派の文学、とりわけ西洋の文学・思想であり、創作も現代的・現実的なものに浪漫を託すものであった。しかし、昭和10年以降、読書の中心は『列子』『莊子』『韓非子』『史記』『漢書』などに移っていく。それとともに、創作の素材や主題なども現代・浪漫的なものから歴史・非現実的のものへと移動していく。すなわち、彼は浪漫主義的、現代的なものを棄て、歴史や虚構という媒体を通じて、生の知恵を探り、東洋精神への回帰を試みるように変るのである。しかも、晩年に近づくほどその傾向が顕著となっていく。これらは、中島敦の精神内部におこった質的な変化を伴う作家としての「成長」のもっとも重要な一表象といえよう。まさにこのような変化があったからこそ、斗南伯父のことも全次的に理解でき、また賛同するようになったのである。

この、中島敦の内なる変化には、現代的西洋文明と伝統的東洋精神に対する考えかたも見られる。その一例として、「斗南先生」の原稿と単行本『光と風と夢』とを対照して見ると、前に引いた「ある一つのすぐれた精神の型の博物館的標本」の前後は、手を加え書き換えられた^(注12)ことがわかる。作者は、原稿の「それは現代精神の直接の母体たる自由主義以前の、ある一つのすぐれた精神の型の博物館的標本であつた」を「東洋が未だ近代の侵害を受ける以前の、或る一つのすぐれた精神の型の博物館的標本である」に直したのである。この改稿は、一見、たいした差異がないようだが、しかし、そこには中島敦の微妙な変化がリアルに表されていることは見逃せない。ここで注意すべきことの一つは、改稿前後とも儒学または儒学を継承する斗南先生のことを「或る一つのすぐれた精神の型の博物館的標本」と記していることで、つまり、それは一つのすぐれた歴史的な精神として褒めたたえられているのである。二つは、「現代精神の直接の母体たる自由主義以前の」を「東洋が未だ近代の侵害を受ける以前の」に書き換えられたところである。前者であると、きわめて客観的な表現であり、おおむね時代の特徴を述べるのみである。改稿後の「東洋が未だ近代の侵害を受ける以前の」となると、その同じ時代を「東洋」が「近代の侵害を受ける」ものとし、その近代を強調するためにまた傍点を入れたのである。この一句からも、「近代」的な「享楽主義」^(注13)を離れ「未だ近代の侵害を受け」ていない東洋精神への中島敦の首肯とその所以がうかがえるのである。三つは、全句のアスペクト「～であった。」を「～である」に直されたこと。これはおそらく、斗南が代表している優れた精神が亡びたのではなく、依然として生きていることを示しているのであろう。

高校時代、「悪詩悪筆、自欺欺人、億千萬劫、不免蛇身」という、伯父の詩作を何気なく口の中で繰り返していたら、「三造は自然に不快な寒氣を感じてきた。何故か知らぬが、詩の全体の意味からはまるで遊離したく（不免蛇身）」といふ言葉だけが、三造を妙におびや

かしたのである]、「彼はくこの世界で冗談に云つたことも別の世界では決して冗談ではなくなるのだ」といふ気がした」と記している。この描写は、伯父から「享けたもの」、あるいは否応なしに与えられた運命、そのものに違いなかった。これは妄想や錯覚あるいは血縁の伝承関係を意味するより、ある精神的なものの伝授を描いているのであろう。すなわち、中島一族の血液に浸透している漢学教養、儒学思想が、祖父の撫山より、斗南伯父を経て、自分自身にまで伝わっているのである。10年後、中島敦はこの事実に対し、もう高校生のときのように反撥はしなくなる。そればかりか、斗南に対する見方の異変に象徴されるように、その価値を認め、自分自身の一部、あるいは精神的な軸として受け入れるようになってきた。それこそ、運命そのものであった。中島敦は、斗南という媒体を通して自己発見することができ、自分の血液に蓄積していた儒学的東洋の精神を喚起するのである。ここでは、先行研究で指摘された「旧家」の「血の弱さ」、「純一なる魂の所有者として存在している」「原型の発見」という物質的なものより、儒学精神への承認と受容こそ、「斗南先生」のもっとも注目すべきものだと思う。

以上の考察により、儒学の鼻祖孔子から撫山や斗南を経て中島敦まで、一つの無形の糸が貫かれているのがいよいよ見えてくる。

孔子や孟子などは生涯、従来の倫理道徳や「周礼」の復興のために教育を行いつつ自分の独特の政治観、倫理観、教育観、道徳観などを宣伝するために、「立言」をし、または列国を周遊して、墮落した時弊を批判しつつ自分の学説や主張や理想などを天下に広げていった。この先哲たちは、理想なる東洋の倫理道徳を建立するために一生を尽くす。斗南は、その儒学の弟子として、まさしく先師たちの足跡を踏んできたといつてよい。彼は幼時から儒学の学習に専念、儒学をもって、学校を興し、教育を行い、また国事を憂へ、執筆活動を行うことによって「立言」をする。大陸によく「周遊」して自分の学問、政治観、歴史観などを世にアピールする。また、近代化する時代において西洋文化の浅薄さを批判するとともに東洋精神の厳守と復興に一生も尽くす。漂泊した説教途上で志を果たせず世界した先師孔子の如く、斗南は「一生、何らのまとまつた仕事もせず、志を得ないで、世を罵り人を罵りながら死んでいつたのである」。そして、斗南に似ているといわれる中島敦は、斗南伯父から「享けたもの」を自分の成長につれ甦らせ、伯父と同じようにたびたび中国に旅行し、「孟子」「莊子」「列子」「史記」などを耽読、また、漢詩を書き、「わが西遊記」「名人伝」「弟子」「李陵」などを創作して「立言」し、ついには時弊の批判にも手を出すようになる^(注14)。斗南伯父が実行動により儒学の道を実験したのに対し、中島敦は文学的行為を通じて古典や歴史の中から東洋精神の有様を探り、道を求めていたのである。しかし、この中島敦も病床で、「書きたい、書きたい」「もう一冊書いて、筆一本持つて、旅に出て、参考書も何も無しで、書きたい」「俺の頭の中のもの、みんな吐き出してしまひたい」^(注15)と嘆きつつ、若くして死んでしまった。ここには、悲壮な相似形が存在している。

斗南先生は、他界した。しかし、「十余年前、鬼雄となつて我に寇なすものを禦ぐべく熊野灘の底深く沈んだこの伯父」は、自分の和歌で言っているごとく「虜か何かに成つて敵の軍艦を喰うだろうと、中島敦には思われてきた。中島敦にとって、斗南の精神は依然として生きているのである。斗南伯父の肉体の死に代って、三造がその事業の継続者として生まれ変わってきた。彼は、斗南伯父がライフワークとしていた「立德」、「立功」、「立文」の「三不朽」の事業を受け継ぎ、その後塵を拝するようになった。「未だ近代の侵害を受ける以前の、ある一つの優れた精神の型の博物館的標本」である斗南伯父は亡くなったが、入れ替わりに三造は「己れの心の在り處を自ら知るようになり、東洋精神の継承者として誕生してきたのである。この意味で「斗南先生」は、中島敦の創作生涯と平行して、12年間に醗酵していった「斗南」認識による自我観照であり、「優れた精神の型の博物館的標本」の復活、再生、または東洋精神への復帰なのである。

注

- (1) 「斗南先生」（『光と風と夢』所収、昭17・7、筑摩書房）の〈付記〉において、「右の一文（『斗南先生』の本文を指す、孫・注）は、昭和7年の頃、別に創作のつもりではなく、一つの私記として書かれたものである」と記している。
- (2) 木村一信「『斗南先生』——成立とその意味——」、(『中島敦研究』〈昭61・2、双文社〉。〈初出は、昭53・11『近代文学考』第6号、原題「中島敦『斗南先生』の成立』〉)。
- (3) 浜川勝彦「『虎狩』まで」、(『中島敦の作品研究』〈昭51・9、明治書院〉、〈初出は昭44・4『国語国文』第38巻4号)。
- (4) 福永武彦「中島敦 ——その世界の見取図」、(〈近代文学鑑賞講座〉『中島敦の文学』、昭34・12、角川書店)。
- (5) 佐々木充「『斗南先生』——原型の発見——」、(『中島敦の文学』、昭48・6、桜楓社)。
- (6) 「近視眼的支那観」と「日本文章の墮落に候」は、「斗南」である中島端が書いた時論の文で、「近視眼的支那観」は大元・10『日本及日本人』第592号に発表し、「日本文章の墮落に候」は大正5年9月『日本及日本人』第689号、臨時増刊号に発表した。これらはまた、『中島敦研究』（昭53・12、筑摩書房）に収録されている。本文の引用はこれに従った。
- (7) 村山吉廣『評伝・中島敦 ——家学からの視点』（平成14年9月、中央公論新社）。
- (8) 『斗南存稿』は、「斗南先生」・中島端が生前に書いた詩と文を、弟の中島棟が、その詩文が紛失しないように蒐集編纂し、昭和7年10月1日に文求堂より発売されたものである。ちなみに、当時の文求堂は田中慶太郎（明13～昭26）の経営していた中国関連書の書店兼出版社で、見識のある出版活動をしたことで知られている。この『斗南存稿』を大学と高等学校の図書館に寄付するかどうかについての心理的な経緯は、「斗南先生」に再現された。
- (9) 羅振玉（1866～1940）は、清末以来の学者としての名が高い。特に甲骨文や金石文などの研究者

として海外にも知られている。上海に日本語教育のための東文学堂を創立し、辛亥革命後は王国維と共に日本に渡り、8年間の学究生活を送り、その交際も多かったようである。のち帰国後、暫く北京に停まったが、1929年からは旅順で文物の調査と研究を行っていた。

- (10) 中島端・斗南『支那分割の運命』（大正元年、正教社）、中島敦は「斗南先生」においてもこの部分を引いた。
- (11) 唐得陽編『中国文化的源流』（1995年、山東人民出版社）。
- (12) 郡司勝義「解題・校異」（『中島敦全集・第1巻』、昭和51・3、筑摩書房）。
- (13) 鷲只雄「中島敦論——「狼疾」の方法」（平成2・5、有精堂）。
- (14) 遺稿「章魚木の下で」（『中島敦全集・第1巻』所収）は、「新創作」昭和18年新年号（第5巻第1号、昭和18・1、豊国社）に発表されたもので、著者が発表した唯一の感想文である。同文では、文学の効用を述べ、時下の戦争協力の文学傾向への詰問が見られ、稀に見られない中島敦の思想の表出として注目される。
- (15) 中島たか「お礼にかへて」（『中島敦研究』所収、昭和51・3、筑摩書房）。

[付記]

本稿は、平成15年広島大学国語国文学春季研究集会での口頭発表をもとに、指導教官久保田啓一先生のご指導のもとに加筆したものであり、また日本学術振興会の外国人特別研究員フェローシップによる研究成果の一部である。ご指導、原稿ご斧正の先生の方々、また発表の席上、貴重なご助言を賜った山根由美恵・陳愛華両氏および日本学術振興会にあわせて心より御礼申し上げたい。

—そん・じゅりん、日本学術振興会外国人特別研究員・広島大学外国人客員研究員—